

---

# 嫌いプラス大好きイコール？

水尾 央

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嫌いプラス大好きイコール？

### 【Nコード】

N5358F

### 【作者名】

水尾 央

### 【あらすじ】

昔からお世話になつてる矢崎医院。そこの若先生は変な意味で子供が好きな変態。危険っ！超危険っ！！でもオレは・・・

## その1

朝起きたら体がだるかった。

浅井 優一。高校2年生。昔は体がすごくすごく弱かったオレだけが最近では丈夫になったつもり。でも、やっぱりこんな風にカゼ引くときもあるわけで・・・

今日はゆっくりしてよう。

今日は土曜日。学校も休みだし・・・と思ってオレは起こした体をもう一度ベッドに倒す。

コンコン

「？」

ドアがノックされる。

「にいちゃ・・・助け・・・」

廊下で崩れ落ちるような音がしてオレは慌ててベッドを飛び起きる。ドアを開けると案の定、弟の誠二が倒れてた。

「大丈夫か？ってお前めっちゃくちゃ熱いつ！！！！」

弟は小学4年。体はかなり弱い。きっと病気がちだった母親に2人とも似てしまったんだろう。

オレたちの母親はオレが10歳のとき死んだ。誠二なんて3歳の時だ。もともと仕事が忙しい父親といた母親の代わりをオレがしながらここまで育てたようなものだからこーゆーときすっげえ心配になっってしまう。

「ちっ・・・あいつのところ行くしかないのか」

オレは一つ溜め息をつく。寝間着代わりにしているジャージを脱ぎ捨ててベッドの下に脱ぎ捨ててあるジーンズに足を通し、パーカーを羽織る。誠二にも上着を羽織らせてからオレは熱でうなされる誠二を担いで階段を降りた。

世界が歪んで見える。オレも結構熱があるようだ。玄関でふらつく体を支えながら靴を履きながらそう思った。今から向かう先は3軒隣の矢崎医院。昔から世話になってるけれど今の若先生と呼ばれるやつはかなり危険だ。

なにせ・・・

小さい子供が大好きな変態だから！！誠二もぜったいカワイイ部類に入るから危険だ！そんなヤツに体をベタベタ触らせるなんてホントに・・・ああ・・・やばいグラグラする・・・

4

「ちわあ・・・」

「わわっ！優一くんっ！！大丈夫！？」

「んー誠二が大丈夫じゃない」

看護師の沢渡さんがオレの背中 of 誠二を受け取ってくれる。一気に背中が寒くなった気がした。

「すぐに若先生呼んで診てもらおうから！若先生ーっ！患者さん見えましたよー」

「はいーっ！！・・・っ・・・優一くん・・・」

若先生・・・つまり変態先生。つか矢崎 田町。田町って呼ぶ方がオレにはしっくりくるのはあいつが医者になる前からの知り合いだからだろう。いや・・・あいつは一時期恋人でもあったんだ。

「患者はオレじゃねえよっ！近寄んなっ！！」  
「・・・ごめ・・・」

田町とオレは丁度一回り歳が違う。そんなあいつと付き合いおうと思っただのはオレが世間知らずだったのと、あいつが変態だなんて知らなかったから。子供しか性の対象にならない変態は高校に上がったオレをさっさと捨てやがったんだ。

くそ・・・起きていられねえ・・・や・・・

オレは待合室の長椅子で倒れるように横になった。



「お腹空いてるならボク・・・作るよ？あ・・・の・・・おかゆと  
かつ」

「・・・てめえが作るのかよっ？じゃあいらねえ」

「っ・・・あの・・・ボク自信あるよ？おかゆぐらいなら」

「変なモン喰わされたらたまったもんじゃねえし」

「・・・」

田町は黙るとオレの顔を恨めしそうに見てからダンスを開ける。そして着替えを手にすると何故か再び出て行った。なんだよあいつ。つていうかなんでオレ田町の部屋で寝かされてるんだよ！誠二は・・・誠二は・・・あいつに変なことされてねえだろうなっ！！！！

「田町ーっ！！！！」

ガシヤンガチャガターンッ

部屋の外で何かを落とす音や倒す音が聞こえてから廊下を走る音が聞こえて田町が飛び込んでくる。



「どうした!？」

「……誠二はどこだ？」

「ああ、誠二くんは親父とお袋の所……今多分お昼ご飯食べたと思う。……ごめん」

「ああん？」

「……優一くんも熱高くて……解熱剤入れたらすごくよく寝てたから……お昼お袋の食べたかったよね？」

田町はしょげたような顔をしてオレを見つめる。田町のおばさんが作るご飯は絶品だ。ホントに美味しい。母親の手料理なんて殆ど食べたことがないオレがおばさんの料理が好きなことを田町はよく知っていた。

「別に……オレ、帰る。誠二にはおばさんの夕飯も食べさせて栄養つけてやって」

「ちょ……ちよつと待って……つと……触らないからっ!もっ少し休んで行ってよ？」

「……お前足……」

「ん?足?……!!!!うわあっ!なんだこれー!!」

田町の足下に血溜まりが出来ていた。ああ……さっき何か落としたりとときに尖ったもの踏んだなこいつ

「痛くねえの？」

「ん・・・気付いたら痛い」

「血、拭いてやるうか？」

「え・・・？」

「足の裏、お前体硬いから上手く拭いたり見たり消毒したり出来ないだろ？」

田町が生唾を飲み込む音が離れているのに響いた。田町は子供しか愛せない。だからオレはフラれたわけだ。でも、オレは・・・

実はずっとずっと田町のことを引き摺ってる。黙ってればいい男なんだ。ロリコンじゃなかったらホントにいい男なんだ。

オレは触れたい。でも触れられたくない。ホントは優しくしたい。でも優しくされたくない。

「・・・ホント？」

「ん？」

「優一くん・・・ボクのこと・・・嫌いでしょ？」

「・・・そうだな・・・でもケガぐらいは診てやれるよ。つつかどつちが医者だかわかんねえ会話だな・・・」

「・・・うん」

田町は押し入れから救急箱を取り出すとベッドの上にタオルを敷いてからイスに座って足をタオルの上に載せた。うええー・・・すっげえ血！痛そうなのに・・・オレが名前呼んで焦らせたかなあ・・・

「っ……」

「痛かったか？」

「大丈夫……何か刺さってる？」

「んー……刺さってはない。穴開いてるけど」

「そっか……何が刺さったんだろ……」

オレたちの間に会話なんて存在しない。あのときから存在しない。  
オレの中学卒業式から……

「も……イイ……ありがと！」

「ちょ……まだ包帯」

「いや……もう……イイからっ！」

田町はオレの腕を振り払って立ち上がろうとする。なんだよ……  
子供じゃないオレはイヤだってことか！そんなにイヤなのか……  
くそっ

「田町っ！」

「はいっ！」

「座れ」

オレは子供じゃなくなっただけから今まで通りオレが命令すれば従う

田町だつてことも知ってる。叱られる子供のように泣きそつな顔をして座る田町。なんだよ……オレ……悪いコトしてるみたいじゃねえか……

「優一くん……ごめん……」

「はあ？」

よく見ると泣いてるのかこいつ?! いや……赤くなってるだけ?! ……って……はあああ?! ……何で……何でコイツ……

勃つてんの! ?

### その3

「ごめ……ホント……ごめん」

「……」

何で？……オレ、何もしてない……っつかそもそもオレじゃ……  
・オレは田町を見上げる。顔を真っ赤にして俯く田町。

やべえ……触れたい。田町に触れたい。あいつをイかせたい。オレが田町と付き合ってたときは何度か触らせて貰ったこともあった。でも、基本的に田町がオレを気持ちよくしてくれて終わり。挿入なんかは一度もナシ。オレから触れたいだなんて思ったこともなかったけど……

や、とりあえず包帯巻ききろう。もし血が止まらなかったら大先生に頼むしかないけど、多分コレで血も止まるとオレは思う。

包帯を巻ききると田町は静かに足をベッドから下ろすと立ち上がる。

「どこ行くんだよ？」

「……うん……隣……」

さつきよりも気力が感じられない声。オレで勃ったのがそんなにイヤだったのか？シヨックだったのか？

どうしたらイイんだよっ！オレはお前に触れたくてホントはお前に触れて欲しいのに……

「ごめんね。ボクのこともっと嫌いになったでしょ」  
「は？」

「・・・ごめんね。でも、心配だからもう少しゆっくりしてから帰るとイイよ。夕飯は優一くんの方もお袋に頼んでおくから・・・」  
「おいっ！喋るときはオレの目見て喋れっ！」

オレに目も合わせようとしない田町に心底腹が立った。怒鳴っても振り返らないこいつがムカついた。  
腹が立って腹が立って・・・そしてどうしようもなく切なくて悲しかった。

「気持ち悪いでしょ？ボクのこと」

「・・・」

「っていうか・・・ボク、耐えられそうになかったから・・・」

「そんなにオレのことがイヤなのか？子供の頃は『ユウくん大好き』とか優しくしてっ！！」

「?!そんなわけっ！！！！・・・優一くん・・・?」

オレは泣きたくないのに流れる涙にムカついた。オレの顔を見て驚いてる田町をからかってやりたいのにからかう言葉が出てこないのにもムカついた。

「お前なんか嫌いだった!!」

「・・・うん・・・」

「嫌いだった!!嫌いなんだっ!!!!」

「判ってる・・・だからボクは隣の部屋に・・・」

「オレがお前を大好きだって気付かないお前なんて嫌いだった!!!!」  
「!」

田町の下を向いたままの顔が勢いよく上げられた。そして田町だとは思えないスピードでオレの側に跪いた。慰めの言葉ぐらくれるんだらうか？今日は特別に抱きしめてくれたりはするんだらうか？

キス・・・いや、オレは風邪引きだからそれはムリだよな・・・高望みすぎ？いや・・・もう・・・いい加減惚れ続けるのも疲れたんだ。だから記念に・・・告白頑張ったご褒美に抱きしめるぐらいしてくれないかな・・・

「優一くん・・・ホント？」

「バカ田町っ！オレはどうしたらいいんだよっ！子供しか好きになれないお前に好きになって貰うにはどうしたらいいんだよっ！どうしたら前みたいにオレのこと好きになるんだよっ!!!!」

「・・・触れてもイイの？」  
「ヤだっ！！！！オレに触るなっ！！！！」

田町は出した手を再び下ろすとオレを真っ直ぐ見つめる。

この目・・・だよ・・・ずっとオレだけを見てて欲しかった目は・・・

「ボクのこと好きなの？ホント？いつから？」

「っ・・・ずっとだよっ！お前がもう一緒にいられないなんて言ってもどうしたらいいのかわからなくてずっと引き摺ってんだよっ！！このバカヤロウ！」

「・・・優一くん・・・やっぱり触ってイイ？」

「イヤだっ！」

触れられたら溢れちゃう。きっとオレは田町を強姦・・・ん？オレが挿れられる場合でも強姦？まあ、イイ。襲うことは確定だ。

・・・ダメだって言ってるのに田町はそっとオレを抱きしめてくれる。こいつ震えてる。イヤイヤなのか？

「・・・ごめん。ボクも我慢できなくて触っちゃった」  
「え？」

「大好きだよ。優一くん・・・子供好きだとかなんか優一くん勘違いしてるけどボクが好きなのは優一くんだけだよ」

「でもっ！！！」

「・・・どんどん色っぽくなる優一くんいつまで理性がもつか自



信がなかったんだよ。だから・・・」

## その4

今までオレが勘違いしてたってコト？っつーかもうオレの体暴走して田町にのし掛かっているわけだけど・・・田町ヒいてる・・・？

でも、止まらないのがうら若き男子の体。オレは田町の唇に自分の唇を重ねる。思った以上に柔らかい感触にオレの背中は一瞬鳥肌が立つぐらい気持ち良さを感じた。

「優一くん？」

「ん？」

「あの・・・それ以上されるとホントにボク・・・」

「ん・・・判ってる」

口ではそう言ってももう止まらないのはオレの方。田町のまだ少し濡れた髪に隠れた耳朵を唇で噛むと田町は小さく喘いでオレを引きはがそうとする。でもオレは止めない。カじゃ簡単に負けるオレじゃない。確かに田町の方が背は高いけどヒョロヒョロしてる青白い体に負けるサッカー部のエースじゃない。

「田町、じつとしてるよ？」

「ん・・・？うん・・・」

田町は首を縦に振る。緊張したような顔をしてるのはきつと田町が勘違いしてるから。

自分のケツの心配をしてるんだろうけど、安心しろよ田町。お前はオレに挿れさせてもらうんだ。

田町のジーンズのファスナーを下ろすと下着を窮屈そうに押し上げる田町の分身が目の前に現れた。オレは迷わずソレにキスをする。

「ゆ・・・くんっ!!ダメ!」

「ダメじゃねえよ。お前はじつとしてろ」

「う・・・うう」

下着のゴムの部分を引っ張って下ろすと田町の雄は勢いよく飛び出してオレは口へそれを納めた。熱い。田町のだって思うとたまらなくてオレも自分のジーンズを下ろすと自分自身をしごき出す。

やべえ・・・マジでキモチイイ。自分の手で擦ってるだけなのに田町の銜えてるだけなのに快感が襲ってくる。

「う・・・ユウくん、ちょっと離して。ボクもユウくんに触りたい。

・・・ってうかユウくんエロすぎて暴発しちゃうよ・・・」

「っ・・・っ」

昔みたいに呼ばれてオレは胸の奥がこわ・・・なんか締め付けられ

たみたいになつて言われたとおりに田町から口を離す。オレの唾液と先走りでベタベタヌルヌルになったそれはすごく卑猥だ。

「ユウくん、ボクに挿れたい？」

「違えよ」

「ボクはどっちでもいいんだ。ユウくんがボクを好きでいてくれるならどっちでもいい。ユウくんが笑ってくれるならどっちでも……」

「……田町、オレん中に入りたくないのか？」

「なっ！！！！入りたいですっ！もちろんっ！でも……さあ……ボクはユウくんが痛いのもイヤだし……」

オレを襲いそうだからって離れた男のセリフがコレかよっ！バカだ。ホントにバカだ……

「オレはずっとお前に挿れて欲しかったよ」

「っ！！！！ちよ……待って。今ホントにいきそうになった」

「田町、オレのこと好きだって言ってみるよ」

「好きだよ。ユウくんのこと大好きだよ」

「ココに挿れたいって言ってみるよ」

「ユウくん……面白がつてるよね？……どこで覚えたのそんな言葉……誰としたの？こういうコト……」

田町にケツ見せたりしてたら田町は興奮じゃなくて嫉妬してきた。なんだよ……こーゆーの喜ぶんじゃねえの？

「誰としたって・・・田町・・・と・・・こんくらい？」

オレは指を卑猥に動かして見せる。田町は顔を赤くしてオレに抱きついてきた。田町を想像しながら1人でやってたのバラしてみたけど・・・ヒク？

共学校なのに女にもモテるのに1度もやりたいたと思ったことない上に田町がオカズだって知ったらヒク？

「ごめんね。ホントに・・・ボク、ダメ。もーダメ。耐えられない」

そんなん願ったりだっと思ってオレは少しだけ笑って田町に抱きつく。もう離れたくない。離したくない。離さないで欲しい。オレは田町がずっと好きだった。離れるって言われたら苦しかった。だから・・・

もう離さないで・・・

「田町っ・・・も・・・ヤ」

「痛い？ごめんね・・・ごめん」

「違・・・も・・・挿れて・・・欲しい。田町のおっきいの欲しい」  
「・・・」

田町が「ふっ」っと息を飲み込む。長めの髪をサラサラ揺らして真っ直ぐな目に野生の本能をちらつかせる。

そうだ・・・お前はただオドオドしてるだけの男じゃないだろ？オレの前だからオドオドなんだろ？オレもたまには男前の野獣みたいなお前を見たいんだ。

「ユウっ」

「っ・・・」

熱い楔がオレの中にムリヤリ突っ込まれる。いつもみたいな笑顔の田町じゃない。小鳥みたいなキスじゃなくて猛獣みたいなキスをする。

オレが呼吸をし忘れて倒れても助けてくれるよな？医者なんだから・・・田町、田町、田町・・・オレはお前がずっと好きだった。子供が好きだって思ってたから子供に嫉妬しまくってた。誠二にも嫉妬したんだ・・・笑えるだろ？なあ田町？

その4（後書き）

次話最終話

## 最終話

自分が眠っていたことに気付いて目を閉じたまま手探りで田町を探した。でもシーツは冷たい。

夢・・・？夢なら醒めて欲しくなかった・・・な・・・

「・・・っ・・・」

目を開けると田町の部屋には変わりないけれど隣に田町はいない。

・・・いや・・・いた。

ベッドの下で正座して頭をずっと伏せている田町が。

「・・・田町？」

「！……！ユウくん……！……！ごめんなさいっ！……！」

「はあ？」

腰の辺りがちょっと重い。これって・・・夢じゃなかったってコト？っつかなにこいつ？土下座なんだろうけど・・・



「お前何してんの？」

「ボク・・・ユウくんがカゼ引いてるのにあんなめちゃくちゃ・・・

「・・・顔上げろよ」

ホントに夢じゃないんだ・・・オレは田町と・・・したんだ・・・カゼ引きつつたつて汗かいて睡眠しつかりとつたせいか頭もすつきりしてるしだるさもなくなった。

「ごめん・・・なさい・・・浮かれすぎました」

「オレの顔を見て言えって何度言ったら判るんだ？」

「・・・」

そう言っても田町は顔を上げない。ちつくしょう。オレが今どんな顔でお前を見るのか判ってないのかよ？つかオレってそんなに怖いわけ？

オレは田町の顎を引っ張りムリヤリ上を向かせる。

「オレは今どんな顔？」

「・・・すごくキレイだよ」

「バカヤロウっ！そーじゃねえよっ！表情だよっ！...！」

「怒ってる・・・」

いや、そりやお前が今気持ち悪いこと言ったからであって・・・気  
緩めたら顔まで弛みそうなのを我慢してるんだぞ？わかんねえの？

「・・・ねえ、ユウくん・・・」

「ん？」

「ボクと・・・付き合ってください」

「・・・」

やべえ・・・来たよこれ。心臓がギュって締め付けられて辛くな  
いのに痛くないのに涙が出そうになる。

悔しいけどオレの田町に対する気持ちはホンモノ。田町の長めの髪  
はやっぱり田町の表情を少し隠したままこいつはオレを見ないで喋  
る。

「オレを見つめてそれ言ったらOKしてやるよ」

「・・・」

田町が拳をギュッと握る。そして深呼吸。そんなに緊張するのか？  
さっきオレの気持ちも判ったハズなのに・・・

田町が勢いよく頭を上げてオレを見つめる。整った顔。オレを真っ  
直ぐ見つめる目。薄目の唇が震えながら開く。

「ボ・・・と付き合っ・・・ください」  
「・・・言えてねえじゃん！」

アハハ！と声を上げて笑うとすぐに田町が曇ったような表情でオレを見つめる。捨て犬みたいってコイツのことというんだろうなあ。  
だからオレは犬の頭を撫でるみたいに田町の頭をくしゃくしゃと撫でて笑ってみせる。

「大好きだよ！田町」  
「っ・・・」

そしたら田町何でか泣いていやがんの！ホントにこいつ一回りも年上の有能な医者なんだろうか？

オレは田町の頭をそのまま撫で続ける。大型犬。忠実で血統もイイ犬なのに泣き虫で・・・それなのにたまに野生の本能剥き出しで襲いかかってくる。カワイイ。大好きだ。ずっとオレが飼ってやるよ。

「田町ー、腹減った」  
「あーうんっ！ユウくん、おかゆじゃなくてお雑炊も食べられそうだね？」  
「フツのメシでもイイくらいだ」

「判った！ボク、何か作ってくるね。もしお袋の作ったヤツ余つたらそれも貰ってくる」

涙をキレイに拭って立ち上がる田町。さっきとは逆にオレの頭を軽く撫でて部屋を出て行く。

オレも裸のままだったから服を着ようと布団を剥がしたら焦った・  
・シーツ・・血付いてる・・やべえっ!!!!どーしょ!?オレ  
の血?!別に切れた感じとかなかったけど・・ん?っていうか・  
・田町って・・中には出さなかったんだ・・

そんな意味判らないことばかり考えながら恐る恐る自分のケツに触れる。

「・・・・・・・・・・」

別に何も付いてない。少しヌルヌルする何かがついてるぐらい。ロ  
ーション・・か?これ・・でもココに田町のが入ってたんだ・  
・

「ん・・・・・・・・」

ちょ・・・・・・・・オレヤバくない?またやりたくなってきた!!!!つつー  
か止まらねえ!中指を少し強めに押しつけると滑りと共にすんなり  
入っていく。いつもみたいに前立腺つつーやつ押しつぶしながら擦  
ってみるけど足りない。薬指も中指に添わせて入れてみるけど刺激

が強くなっただけで足りない。

「う……んっ……ん……田町……田町ーっ！」

田町とたった1回しただけでコレ。オレこそ変態じゃね？でも……でも……また廊下でドタドタ走る音がしてすごい勢いでドアが開く

「……っ……ゆ……くん？」

「ごめ……これじゃイケな……っ……挿れ……田町い」

「あ……も……」

田町はイノシシみたいに真っ直ぐオレに突撃してきて後ろからオレの腰を支えた。カチャカチャって金属音がしたからベルトを外してジッパーを下ろしてるんだろっ……

カタン……ガサ……

田町の長い手がベッドの横にあるサイドボードから何か取り出す。

あ……田町ちゃんとゴムしてくれてたんだ……

そのとき初めて田町がゴムしてたことも知ったオレはさっき相当グチャグチャになってたんだって判った。田町の指が気持ちよくて田町の熱いのが気持ちよくて……

「あ……ああ……」

「も……ユウくん……ボクはユウくんみたいに高校生じゃないんだからサスガに……疲れました」

「ああ?!これからオレと付き合いたいんだったらこんくらい当然だろ!?!」

2ラウンド目を終えてオレは田町とベッドに寝転んだ。今度は意識を手放すこともなくちゃんと田町と寄り添って横になれてる。幸せな気分ってこーゆーこと。

「……ユウくんが望むならボク……頑張ります」

「んー!つつか田町さ、ゴムとかローションとかあるわけ?今までやっぱり誰かそーゆー相手いたってコト?」

「ふえっ?!?いないっ!?!?いませんっ!?!?」

ベッドから体を起こして全身で「NO」を表現する田町。

「いや……別にこれからはオレだけってなら全然イイんだよ。た

だ……これからは前の人と使ったローションとかはイヤ……かも……って思っただけだから……」

「違うよっ！！ユウくんだけっ！！こ……れは……その……1人でする……やつ……」

「ん？」

「ごめんなさい……ユウくんを……想像して……思い出したりして……シテました」

ああ……なんだろう……このギュツ！って感じ……田町はオレを想いながら1人でしてたってことかよ……こんなにイイ男のクセに！男も女も抱かないでオレを想像しながら……あーやべえ！これが高校生のサルって言われる所以か……また勃ってきた……

これからは田町1人でするヒマもないくらいオレが乗っかってやる。

「もー離すなよ？」

「ん？」

「もー二度とオレを手放すな。言いたいことはつきり言え。……あと……もう少し自惚れる」

「自惚れる？」

判ってないな……こいつ……

オレがどれだけ田町を好きだと思ってるんだよ！好きなのは一方通行じゃないってまだ判らないんだろ？

「オレは相当お前に惚れてるから自信持てっつーこと！」

「っ……！！！」

ちよつと照れくさいことを言つたら田町はまた目に涙めいっぱい溜めてポロポロそれを零し始めたんだ。

ホントこいつは情けない大型犬。一回りも年下の男に振り回される情けない男。でも・・・それはオレに対してだけ。

愛してるから幸せにしろよっ！期待してる！オレのお医者様。



## 最終話（後書き）

拙い文章で綴ってきましたが最後まで読んで頂けて光栄です。  
もしよろしければ今後のスキル向上のために評価・感想など頂けたら光栄です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5358f/>

---

嫌いプラス大好きイコール？

2011年1月8日03時38分発行